

すばる

白岡市立南中学校
校長室通信
平成27年4月27日

No.10

先生のINPUTとOUTPUT

先日の市教研総会後の講演で input と output、そしてたぶん「処理」という意味合いの process という指導の手順について話があった。私たちは、input（覚えさせたり、説明を聞いてわからせたり）にどうしても指導がいきがちだが、output（「使う」「体験させる」「表現する」など）をさせないと process 自体が生徒の頭の中で起こりにくく、本来の意味で身につかないという指摘だと理解した。それに刺激されて「小集団学習の jigsaw 法」を前号で紹介した。jigsaw 法のキモは、講師の言葉を使えば、小集団内の関係性を「相互依存」にさせることによって、強制的に output が求められることになって、戻って input に意味を与えることになるもの（かえってわかにくい<苦笑>）。言い換えると、この学習法では生徒はあとで必ず説明しなければならない状況になるので、必死になって事前学習をせざるを得ないということ。私は社会科の授業の中で、この授業を「あなたが先生」と命名して生徒に説明した。事前学習は「教材研究」（笑）と呼び、説明

input/
output

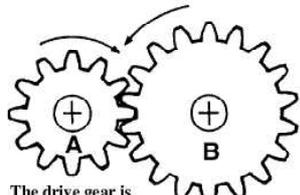
Brush up your geometry, dust off your protractor, and attach a ruler; only you can have a hand in your own Chrome Experiment for a chance to have your machine build you at Google I/O.

Start building.

する場面は発表会ではなく、あなたの「授業」だと言った。学習前の説明では、「みなさんには、教育実習をしてもらいます」と宣言していた。単元の学習を終えて感想を聞いたとき「先生って大変なんですね」というのもあったほどである。

ところで、講演を聴きながらもう一つ思っていたことがある。それは、生徒の input と output と同様に、先生方のそれはどうかということだ。先生方が日々行う授業は output にあたると考えてよい。指導も言い換えれば、その先生の output である。私たちは授業という形で日々表現活動をしている。教師の「指導力」とは、言ってみればその先生の「表現力」なのだ。指導過程や教材提示の工夫も、先生自身から見れば表現の工夫にあたる。プリントや ICT 機器の活用、話術、板書等々、すべてはその先生の表現力の発露である。

南中の先生方のことではないが、教員の input はどうか気になってくる。先生の豊かな表現（＝授業：output）のためには、それに見合うだけの input がなければならない。若手の先生については、この点についてあまり心配していない。かなり追い込まれながらもすごい input をしていると思うから。むしろ気になるのはベテランの方。input が少量でも、その人の process の技量が高いだろうから、少々の工夫で見た目心地よい output ができてしまう可能性がある。だが、学校全体という視点から見ればそれではベテランの役割を果たしきれてはいないのでは？変な言い方になって申し訳ないが、若手がそのまま年



老いたのがベテランの意味ではないということ。法にわざわざ定められる教職員の研修は、権利であると同時に義務でもあるのは、そういうことなのではと私は思う。

こういうとき繰り返し思い出す言葉がある。「学校で一番学んでいるのは先生ですよ」とある人が言ったこと。私も超ベテラン（笑）。励ましの言葉でもあるが、耳が痛い。